

202
号室

金魚




あわゆい かなこ

金魚

天国までの階段は、人間が想像するような純白でつるつとしていたエレガントな階段ではなかった。それは、山のてっぺんに建てられた古い寺に続く階段のように、一段一段の高さがそろっていないくて、表面がぼこぼこしていた。





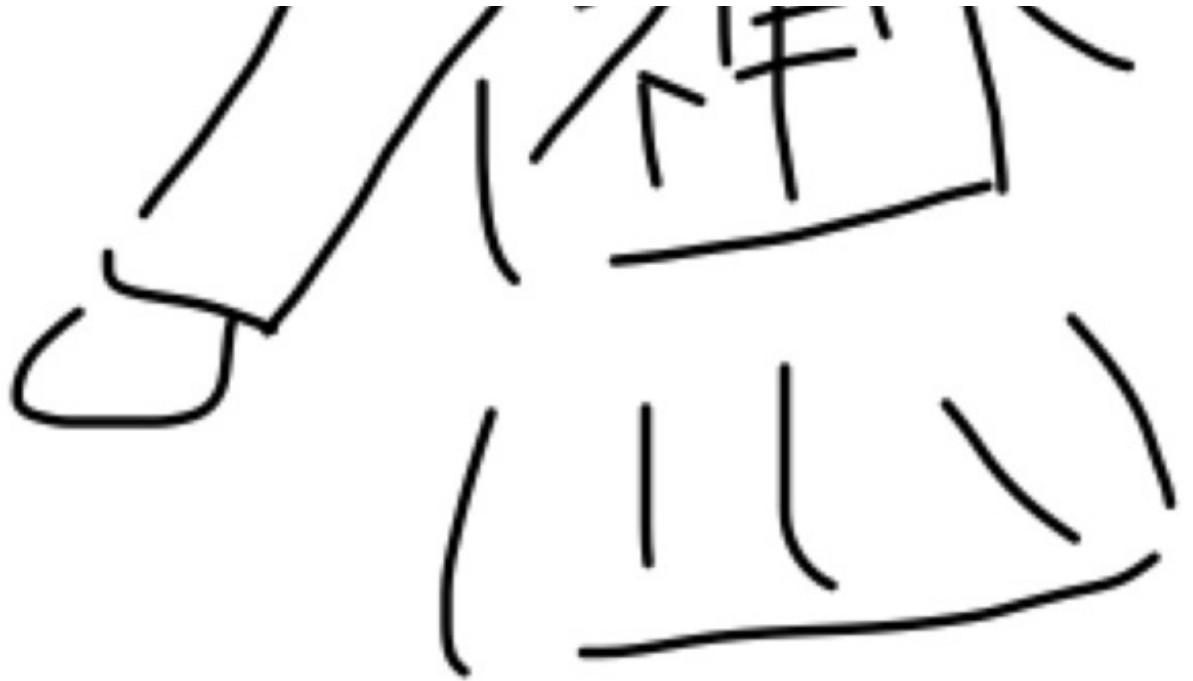
私は金魚として死んだから、エレベーターを使うことができた。足がない生き物は特別にエレベーターを使うことが許されているのだ。私は金魚として死んだことを嬉しく思った。

昨日のお昼ごろ、綺麗に掃除された広すぎる水槽のなかで、私は死んだ。死因は老衰だ。金魚にしてはいささか長生きしすぎたし、色々なことを知りすぎていた感があったが、特に心残りもなく、苦しむこともなく最後を迎えることができたのも、飼い主様のおかげである。

彼は、ある夏の終わり、彼の家のある神社のお祭りで私を掬ってくれた。大きなお祭りだったから、屋台の数もかなり多く金魚すくいのお店もいくつかあった。その中から、私が泳いでいた（売られていた）お店を選び、250円払い、ポイを受け取って、真剣に優しく私を掬ってくれたのだ。彼の視線はずっと私の上に集中していた。私は恥ずかしさを隠しきれず、体中が真っ赤になったのを今でも覚えている。私はその瞬間恋に落ちたのだ。彼に掬ってほしくて、抵抗することなくゆっくり深呼吸した。

エレベーターを降りると、神様が机に向かって座っていた。神様は緑色の野球帽をかぶり、足を組んでパイプ椅子に座っていた。





「こんにちは」と私は言った。

「はいはい、あなたは...金魚ね」と神様は早口で言った。

「今日は色々な生き物がやってくるのよ。蟻にヒョウに神経質な象。それからクリオネに、ウサギにラバにロバに。ラバだってロバだって私はどっちでもいいのよ」

何と答えればよいのか分からなかった私は、

「一日中パイプいすではお尻がづらいでしょうね」と言った。

神様に私の言葉は届かなかったようで、机に広がった書類をガサガサめくったり、紙にサインをしたり、野球帽を脱いで頭をかいたりしていた。しばらくすると、ハアー！っと大きなため息をついて、

「私はあなたの来世を決める神様です。」と、今まで数え切れないほど言ってきたのであろう決まり文句を、もう神様やめたいという雰囲気をかもしだして言った。

「あなたの希望をききます。できるだけ希望に沿うようにしますが、まあ数に限りがあるから、第一希望になるとは限りません。その場合はあしからず」

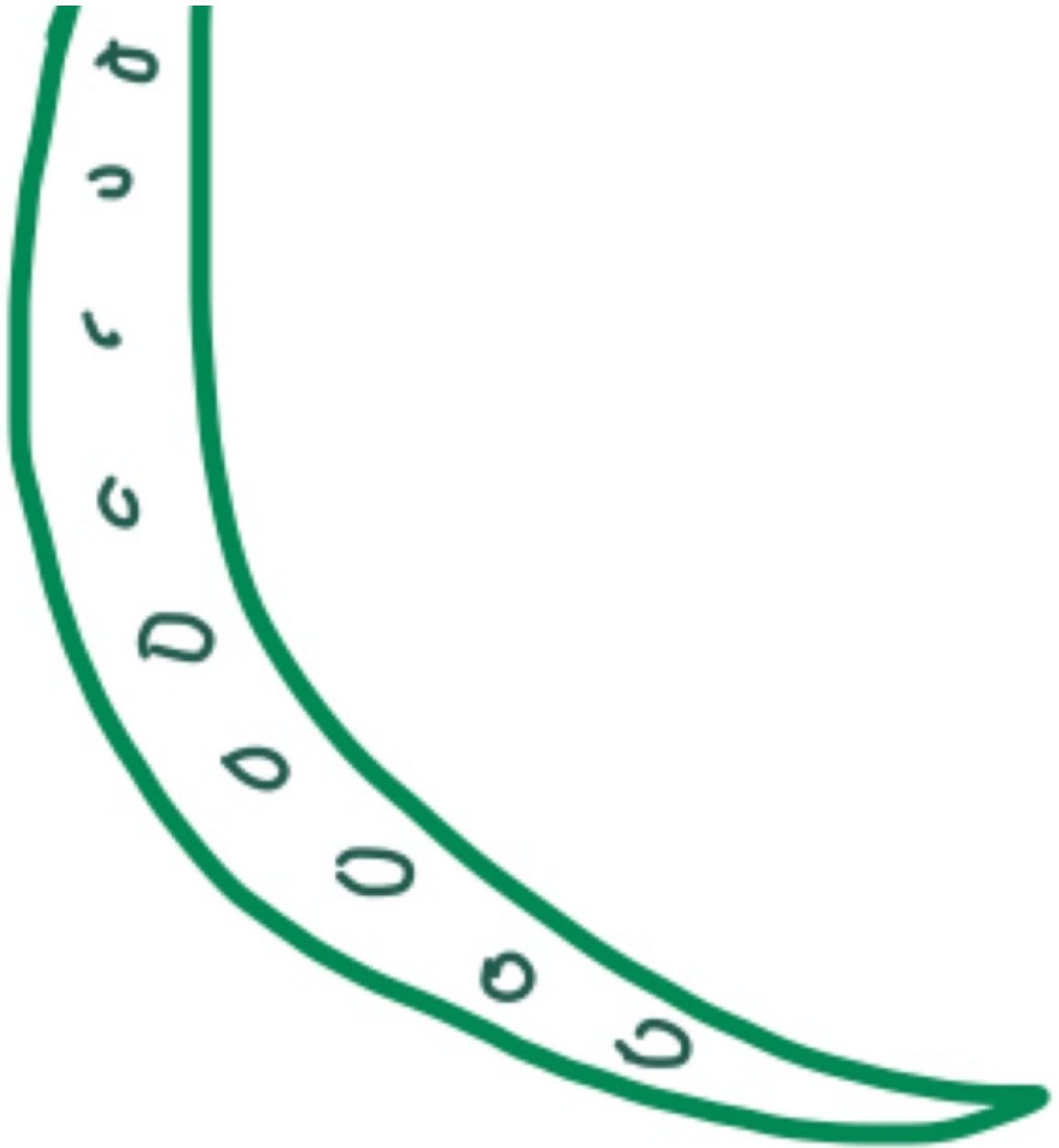
「数に限りとは...どういうことでしょうか？」

「だから一、例えば、来世あなたは亀になりたいとする。でも私はOKとは言えないの。なぜなら亀はとっても人気だから、もう今年のリミットを越えているのよ。今年、来世亀になっていいのは...2万5632匹。もう2万5632匹が来世で亀になることに決まったの。だからもうだめー」

「私は亀にはなりたくないです」

「それはよかった。じゃあ何がよいかしら？私としては人気のないミカツキモなんか希望してくれるとありがたいんだけど」





「残念ながらミカツキモにもなりたくはないです」

「そうよね、私も嫌よ。神様の次はミカツキモなんて。もう人生ついてないって感じ」

私は少し考えて、

「私、羽がほしいわ」と言った。

水槽の中から、私は羽を持つ生き物をたくさん見てきた。水色の天井を羽を広げて自由に飛び回る生き物に憧れていたのだ。

「羽ねえ。じゃあオーソドックスに鳩はどうかしら？ 幸せの象徴やなんやらで人間に重宝されるわよきっと。それかクリオネは？ あれ、人間に人気よこの頃」

「クリオネ？」

私がクリオネを知らないと言うと、神様はクリオネの写真を見せてくれた。



それは私が憧れた水色の天井を飛び回る動物ではなかったので、私は首を横にふった。

「心臓まですけすけじゃ、何もかも見透かされそうで」

神様は私の顔を見てにこっと微笑んだ。そして鳩の写真も見せてくれたが、私が憧れていた羽を持つ動物とはだいぶ見栄えが違ってがっかりした。

「人間に愛想を振りまいて、ご飯をもらうのは苦手なんです」

私を掬ってくれた飼い主様は、私のことを心から愛してくれていたと思う。何しろ私は彼に恋をしていたから、見られるのが恥ずかしくていつも水槽の端に丸まっていたのだが、彼は毎日欠かすことなく決まった時間にエサを与えてくれた。そして私がちゃんとエサを食べたことを確認してにこっと笑いかけてくれたのだ。私が彼に愛想を振りまいたことなど一度たりともない。でも彼は一度たりともエサの時間を忘れることはなかった。水槽が汚れると、丁寧に私を掬いだし、一時的に金魚ばちに移して、水槽を掃除した。私は優しくった彼のことを思い出して、少しだけ悲しくなった。

「羽があって自由に空を飛びまわれる...あとは天使ね。あ、天使いいじゃない。どう？」
神様は名案を思いついた！という顔で身を乗り出し、私の目をじっと見た。

飼い主様はとても優しくったけど、いつも悲しそうな目をしていた。私が彼の家の水槽に住んでいた間、一度も彼の友達が遊びに来たことはなかった。考えてみれば、長年同じ部屋で暮らしていたのに彼の声を聞いたことがなかった。彼はどんな声をしていただろう。私は彼の声も聞かずに簡単に死んでしまったことを後悔した。

私が住んでいた水槽は彼の部屋の出窓に置かれていた。ワンルームマンションの角部屋の出窓に置かれた水槽で、私は服を着替える彼の背中を見つめ、彼と一緒にTVを見て、外の景色を見た。

外の天井が水色になると、彼は着替えをして玄関のドアを開けてどこかへ行ってしまった。

天井の色が濃い青になると、玄関のドアを開けて戻ってきた。天井が黒くなると、間接照明をつけてTVを見たり本を読んだりした。お酒を飲みすぎることが多かった。

彼は悲しい目をしていただけれど、人生に楽しさを求めているわけでもないようだった。

孤独から抜け出そうとはしていなかったし、孤独を愛しているわけでもなかった。ただ日々を繰り返し繰り返し繰り返すことで、なにか罪を償っているような背中をしていた。

「天使になれば、人間に恩返ししたりできるのでしょうか」

神様にそう尋ねると、神様は驚いた顔で、

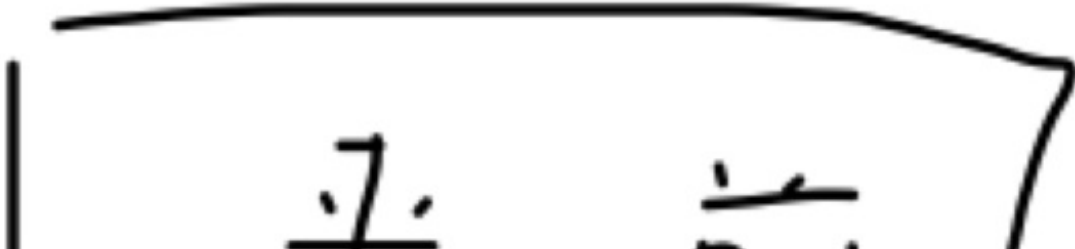
「オンガエシ？考えたことなかったわ。もちろんできるわよ。恩を仇で返すことだって可能よ」と言った。

「じゃあ天使をお願いします」

私は少しだけ口角をあげて、それから軽くお辞儀した。

「けってー」

神様はそう言って、書類にテンシと書き込んだ。とてもとても汚い字だった。



七 一



私はそのようにして、来世で天使になることになったのである。

前世は金魚だったから
私羽が欲しいわ
でもクリオネは嫌よ
心臓まですけすけじゃ

耐えられない

屋台が並ぶ縁日で
掬ってくれたのは君
それは昔々の記憶
僕を救ってくれた

君を探してた
一言お礼を言いたくて
恩返しをしたくて

今君の体内に潜り込んで
光が射すようにカーテンを開けたい
君のため息 君の迷い
シャボン玉につめて飛ばしてみせるから
心臓で僕を飼ってくれ

君の左手にぶら下がる
小さな海の中から見た
ぼやけた世界
それは希望に満ちた世界の片隅

賽銭を投げ入れて
両手を合わせた君が
あの日何を祈ったのか
僕には分からなかった

羽を授かった
僕は天使になりました
お力になりたいのです

今君の体内に潜り込んで
暗闇から悲しみから君を救いたい
心の奥癒えぬ傷も魔法の優しさで
溶かしてみせるから
心臓で僕を飼ってくれ
金魚掬いのポイが何度破けてしまっても
今度は僕が掬ってみせる
君を救ってみせるさ

金魚

<http://p.booklog.jp/book/93816>

著者：あわゆいかなこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rmionknshea/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93816>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93816>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのバナー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ